

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2019年2月16日

文責：JUN

書くことが目指すもの～作文指導の原点

1 何のために文章を書くのか

文章を綴る（書く）、それは私にとって、毎日の欠かすことのない日常的な行為である。学校訪問において触発されたこと、発見したこと、メディアの視聴によって気づいたことをメモしたり文章にしたりする。参観した授業についてのコメントを記述して学校に送付することもたびたびだ。いま読んでもらっているこの「学びのたより」は、月ごとに発行する私にとって生命線のようなものだ。

だから、何をどう書こうかと考えていない日はない。愉快なのは、入浴中に決まって「そうだ、これだ」と書きたい文章がひらめくことだ。湯船に浸かってゆったりしていると、ふっと浮かんでくる。そんなときの私の入浴はカラスの行水だ。湯から上がると急いで着替え、髪を乾かすのもそこそこに急いでペンを持つ、あるいはパソコンに向かう。そうしないと浮かんだ言葉が消えてしまうからだ。

もちろん、さまざまな人とのメール交信も日常的に行っている。しかしそれは私の中では「綴る」という分野には入らない。単なる連絡手段、あるいは会話のようなものだからだ。私にとっての「綴る」意識は、結構、思考を要するものに限られている。

本稿で述べようとしているのは、表題にあるように、子どもたちに対する作文指導である。子どもたちに文章を書かせるのは、何を指して、どのように行くとよいのか、それを述べようというのだ。しかしそのためには、私自身がどう文章を綴っているか（書いているか）を問わないわけにはいかない。そこで、作文指導について考察する前に、私自身の「文章を書くこと」について考えてみることにする。

私が、日々、それほど文章を綴る（書く）のは何の為だろうか。まず、だれかに読んでもらうという目的があって書いている。何かを他者に伝えるために人は言葉を使う。話し言葉はほとんどこの目的で使用しているが、書き言葉にも当然、この「伝達性」がある。だから、私が文章を書く際も、だれに向かって何を伝えたいのかをいつも意識する。

しかし、綴る（書く）という行為は、伝達のためにだけ行う行為ではない。

「学びのたより」がそうだし、書の執筆においてもそうなのだが、私は、自分自身の考えを確かめるため、いま立ち向かっている事柄にどういう意味があり、その事柄をどうしていけばよいのか、それを見つけないから書いていると言える。もちろん、そのことは、読んでくれる他者に伝えるという伝達の意識はあるのだが、それより前に、私自身が私自身の内で思考し格闘する、それが綴る・書くという行為なのだ。だから、書いているうちに、書き始めるときには意識していなかったことが浮き上がってくるものがしばしばある。それは、多くの先人が述べているように、「書く」ということは「考える」ことだからである。

「学びのたより」の場合も、書の執筆の場合も、何を書くのかというテーマ意識は必ずある。それが

なくて書き始めることはできない。しかし、すでに頭の中にあること、組み立てられていることを文字に落とすのが、私にとっての「書く」という行為ではない。準備しておいた材料をもとに「文章にする」という行為は、その材料を見つめることだし、その材料の奥や裏にあるものを探し出す行為だし、その材料の周辺にあるものとの関係・つながりを探り出す行為である。それらすべてがわかっていて書き始めているわけではない。書くという行為は、文章に組み立てるということだから、組み立てていくうちに、物事と物事の関係やその物事がつくり出している世界が見えてくるのだ。

私はそれがたのしみでならない。だから、読んでもらうという伝達の意識はあるのだけれど、それよりも前に、自分が関心を抱いていること、関心を抱いて見つめなければいけないことがどういうものなのか、そこに何が存在するのかを見つけることができる、それは私にとってワクワクするようなたのしみである。つまり、私は、私自身のために、私自身に向けても綴っている（書いている）ということなのだ。

書くという行為には、「書いて伝える」「書いて思考する」という二つの意味があり、そのどちらが欠けてもよりよいものにはならない。人は言葉で思考し言葉でつながり合っているのだから。

ということは、子どもたちに対する作文指導の場合にも、この二つの意味が存在するように、そのことによって、書くことがたのしみになるようにしなければならない。だれに対して書くのかがはっきりしない書かせ方、書くことによる物事への出会い方に魅力を感じさせない書かせ方にしてはならない。「相手意識」と「対象意識」の希薄な作文指導であってはならないのだ。

2 説明文「じどう車くらべ」における作文指導

Kさんが説明文の授業づくりに取り組み始めたのは2年半ほど前のことである。それ以来、私は、立て続けにいくつかのKさんの説明文の授業に接している。実際に参観することもあればビデオ映像によるものもある。一つのことにと絞って納得するまでやってみる、そんなKさんの取り組み方は本当に素晴らしい。

そのKさんが「じどう車くらべ」という説明文で授業をした。しかも、今回の授業では、「書くこと」の指導に取り組んだというのだ。漫然と同じことを繰り返すのではなく、次なる課題を設定して挑戦する、Kさんの素晴らしさだ。

「じどう車くらべ」という文章は、複数の自動車の仕事とつくりを見つめ、そのちがいを比べるように書かれたものである。たとえばトラックについては次のように書かれている。

トラックは、にもつを はこぶ しごとを して います。 その ために、うんてんせきの ほかは、ひろい にだいに なって います。おもい にもつを のせる トラックには、タイヤが たくさん ついて います。

このほか、バスや乗用車、クレーン車についても同じように説明されていて、その後には、はしご車はどんな仕事をしているか、そのためにどんなつくりになっているかを考えるようになっている。

私が見せていただいた授業は、それらの学習を終えた後、それ以外の車を子どもたちに選ばせて、その車のしごととつくりを書くという内容のものだった。説明されている文章を読むだけでなく、自分たちも車について書くという学習はたいへん意味のあるものだと言える。教科書もそのように構成されているのだが、その活動の時間を研究授業として公開する授業にはこれまで出会ったことがない。つまり、

「読む」ことがこの教材の中心であって、「書く」という学習はその付け足しのようなものとしてしか受け止められていないからだろう。Kさんはそうは考えなかった。むしろ、教材文を読む活動はその後で書くために必要なものだとも考えられたのだろう。

授業はおおむね、次のような順に進んだ。

- ① 「じどう車くらべ」全文を音読し、それぞれの車の「しごと」と「つくり」を思い出す。
- ② ペアになって、二人で決めた車の「しごと」と「つくり」がどんなものか見つける。
- ③ 選んだ車の「しごと」と「つくり」について、わからなくて困っていることをみんなに尋ねる。
- ④ ペアの2人で学び合いながら、ノートに、選んだ車の「しごと」と「つくり」を書き入れる。その際、「つくり」は3個か4個探す。
- ⑤ この時間、頑張ったこと、頑張っていた友だちのことについて発表する。

授業経過からわかるように、子どもたち一人ひとりが、自分の選んだ車について説明する文章を「書く」のは次の時間である。この時間は、そのための下準備として、それぞれの子どもが選んだ車の「しごと」と「つくり」をノートに書きだしておくということであった。

手順を踏んだ手堅い進め方である。教材になっている説明文が、前掲したように、どういう仕事をしているか、そのためのつくりはどうなっているか、という順に書かれていて、それを読んだ直後であり、作文する前に、すべての子どもが書けるようにとペアで仕事とつくりを書きだしておくという措置をとっておられることからして、おそらく、どの子どもも文章にすることができただろう。そういう意味で、しっかりした指導である。

ただ、ここで考えてほしいのは、本稿の最初に述べた二つの事柄、「相手意識」と「対象意識」についてである。だれに説明するために書くのか、そして、その車について自分はどういうことを知りたいのか、どういうことに関心があるのか、どこに魅力を感じたのか、つまり何を考えたのか、それが存在するような書かせ方になっているのか、ということである。

まず一つ目の相手意識についてはどうだろう。後でそれぞれがどう書いたのかという発表はさせるだろうが、そういうことではなく、子どもに「だれに伝えるのか」という意識を抱いて書かせていたかどうかが大切なのだ。それが抜けていないだろうか。

二つ目の対象意識については、書くことで、車について子ども一人ひとりに考えさせたい、新たな気づきを生み出させたいという考え方を教師がしていたかどうかだ。もし、そういう考え方があれば、教科書の文章は一つの例であり、その形式は形式として、子どもたちは自分の気づきや思いを書ききる文章にするだろう。そうではなく、教科書の文章のパターンに当てはめるだけの書かせ方をしてしまったら、それは文章を書くことの本質から外れてしまう。

文章を書くという行為は、創造的な行為である。ゆくゆくは文体が人それぞれのものになる。私たちが目指している作文教育は、だれが書いても同じになる「お役所文章」を指導したいわけではない。その子どもならではの人間的な書く力を育てたいのだから。

3 どんな指導が子どもにとっての書く力を伸ばすか

一人ひとりの子どもの、その子らしい文章を書かせるには、書く前の指導よりも、一旦書いた後の指

導のほうが大切である。

Kさんの授業で、救急車について書いた二人の子どもの「しごととつくり」を見ていただきたい。

<p>きゆうきゆうしゃ A男</p> <p>しごと 人をたすけるしごとをしています。</p> <p>つくり ・うんてんせきのほかは、ちりようするところになっていきます。 ・サイレンをならしていそいでたすけます。 ・うしろがおおきくあくようになっていきます。 ・おもいでタイヤが二こくつついていきます。</p>	<p>きゆうきゆうしゃ B子</p> <p>しごと じこでけがした人やきゆうなびようきの人をのせるくるまです。 そのために</p> <p>つくり ・きゆうきゆうしゃはサイレンをならして、はしりません。そのときはびよういんまでにしんぞうまつさーじをします。 ・きゆうきゆうしゃのなかには、ほうたいがあります。</p>
--	---

見ていただいてわかるように、これは、最終的に書いた文章ではない。その前段階として、選んだ車の「しごと」と「つくり」をノートに書きだしたものである。これをもとに、次の時間に文章化するのである。

A男は外国とのつながりのある子どもであり、B子は書くことに時間のかかる子どもだということである。その二人がこれだけのことが書けたのは、Kさんが普段からふんだんにペアによる学び合いを実施しているからにちがいない。だから、おそらく、教科書の文章のように書くことはそれほど難しいことではないと思われる。

しかし、前述したように、教科書のパターンにはめて書けるようにすることが、本質的な作文指導ではない。選んだ車のことをよく知るために書くとか、自分のわかった車のことをだれかに伝えるために書くとかという目的がなければならぬ。書くことにそのような目的があると、書き手である子どもに、何をどう書くのかという思考が生まれ、「このことはどうなんだろう」「このことも伝えたい」「どう書けば伝わるのだろう」という模索が始まる。そうすると、教科書のパターンにあてはめるだけとは全く異なる書き方となる。

では、子どもたちに「このことはどうなんだろう」と考えるように仕向けるにはどうすればよいのだろうか。はっきりしていることは、このままでは子どもたちの意識はそういうものにはならないということである。A男もB子も、さらっと教科書のような文章にするだけで終わってしまうだろう。そうならないために必要なのは、ノートに書きだしたことで「つくり」と「しごと」が本当にわかったのだろうかと気づかせることである。そしてもっともその車について考えさせることである。けれども、いくら「もっと考えなさい」と言っても子どもは本気で考え始めないにちがいない。子どもが本気になって「もっと考えよう」と思い、車のことをさらに知ろうと努め、それを書こうとする、そのために、ここでどうすればよいのだろうか。教師はそう考えるべきである。

書くことは決められたパターンにはめることではなく、書こうとしている対象について深く知ることであり、知ったことを他者に伝えるために行うことだという考えを教師が持っていたら、そのためにどうすればよいかという方法はきっと浮かび上がってくる。その一つの方法として、授業者であった頃の

私が頻繁に行っていたことがある。それは、第一次的に子どもが書いたものを取り上げ、子どもたち全員で考察するということである。子どもが書いたものは、子どもの中に生まれた事実である。その事実で考えるのが子どもにとってもっともリアリティのある意欲の湧くものだったからである。

その手法を使えば、前ページに掲載した二人の子どもの書いたものは素晴らしい材料になる。同じ救急車を取り上げていて、それぞれの説明に違いがあるからである。

まず、二人の書いたものを子どもたち全員に読ませる。プリントしておくとか、大きな紙に書いておいて黒板に貼るとかする。まず何よりも、このように書いていることを褒める。そのうえで、二人の記述の違いをペアになって探させる。個人で探すのもよいけれど、すべての子どもの学びにするためにはこういうときはペアのほうがよい。そうすると、次のようなことに気づくのではないだろうか。

- ・ A男さんは、「人をたすけるしごと」と書いているけど、B子さんは「じこでけがをした人やきゅうなびょうきの人をのせる」とかいてあるので、A男さんの書いている「人」というのはどういう人なのかよくわかります。
- ・ B子さんは「のせるくるまでです」と書いているけど、A男さんは「たすけるしごと」と書いているので、そういう人をのせて助けるのだと思いました。
- ・ A男さんは、「うんてんせきのほかは、ちりょすうするところになっています」と書いているけど、B子さんは「しんぞうまっさーじをします」と書いているので、二人のを合わせると、「ちりょう」というのは「しんぞうまっさーじ」のことなのかなとわかります。
- ・ B子さんは、「ほうたいがあります」と書いているので、包帯で巻くのもA男さんが書いている「ちりょう」なのかなと思いました。
- ・ A男さんもB子さんも、「サイレンをならしてはしる」と書いています。僕も、サイレンをならして走っている救急車を見たことがあります。だけど、A男さんは「いそいでたすけます」と書いてあるので、サイレンを鳴らすのは急いで助けるためなんだとわかりました。

このようなことに気づけると、子どもは必ず、「だったら、これはどうしてなの？」と、もっと知りたくなることが浮かんでくるものである。それが生まれてきたら、当然、発表させるとよい。ただし、すぐ発表させないで、それが出かかってきたタイミングでペアの時間をとる。そうすれば、たとえば、次のようなことが出てくるのではないだろうか。

- ・ どうして、「うんてんせきのほかは、ちりょすうするところになっている」のかな？ 僕は、救急車ってけがをした人や病気になった人を病院に運ぶだけだと思ってた。
- ・ A男さんは「うしろがおおきくあくようになっています」と書いているけど、どうして後ろが大きく開くようになっているの？
- ・ 救急車はサイレンを鳴らして走るんだけど、急いでいるのはわかるけど、どうしてサイレンを鳴らすのかな？
- ・ B子さんは「しんぞうまっさーじ」をすることと「ほうたいがあります」と書いてあるので、よくわかったんだけど、A男さんの書いていた「ちりょう」は、まだほかにもあると思うけど、救急車の中でどういうちりょうをしているのかな？

と、こういうふうなことが子どもたちから出てくるのではないだろうか。

もちろん、社会科や生活科の授業ではないのだから、そういう疑問を取り上げて深めていくことには

ならない。では、どうするかだが、こういう子どもたちの反応を引きだしたうえで、A男とB子に、二人なりの文章を書かせるようにすればよいのだ。

友だちが言ったことを聴いていた二人は、二人が書いたことの違いから何を学んだか、友だちがもっと知りたいと言ったことのどれに共感したり、どれに答えたいと思ったりしたか、そういうA男とB子の受けとめが文章に表れる。そう思うのである。

そのとき、二人は、きっと、学級の友だちが読んでくれることを意識して書くのではないだろうか。つまり「相手意識」が明確になるのである。

さらに、友だちの反応によって、救急車に対する認識が深くなったにちがいない。それを文章にかくということは、その認識をさらに深めることになる。つまり、救急車とはどういう車なのか、もっとよくわかってくるというわけである。

4 子どもたちに伝えたい「書くこと」と意味と良さ

「書く」という行為は、だれかに「伝える」という行為であり、物事について「深く考える」という行為でもある。だから、何をどう伝えるかと考えれば考えるほど、文章は変化するし、書いている事柄について、書きながら考えれば考えるほど、わからなくなったり、そのわからなさを超えてわかってきたりして物事に対する認識が膨らみ、いま書いていることに対する関心が深まったりするものである。私たちは、「書くこと」の大切さを、そのようなものとして子どもたちに伝えていかなければならない。

「書くこと」は決して楽な行為ではない。むしろ、面倒な行為である。だから、書くことが好きだという人は少ない。私に教室があった頃、あるテレビ局のクルーが一日教室に入ったことがあった。作文指導についてのルポが目的だった。作文の授業を撮影し、私へのインタビューもあった。その最後に、ディレクターが私に、「職員室に行っていてほしい」と言ってきた。私は、「そうか、子どもたちにインタビューするんだ。子どもたちの本音を引き出すために、先生のいない状態にしたいのだ」と察して、なんとも愉快的気持ちになって教室を後にした。

しばらくして、「先生、終わった！」と言って子どもが呼びに来たので教室に戻ると、子どもたちがにやにやしている。「何？ 何があったの？」と私が訊くと、ますますにやにやした子どもたちは「テレビに映ったらわかるよ」と言ったのだった。

放映された番組を見て、子どもたちが何を語ったか私は知った。「書くことは面倒」「好きではない」と言った子どももいる一方、その子どもも含めてインタビューを受けたどの子どもも「書いてよかったということがいっぱいある」「先生の返事があるから僕らは書く」と語ったのだった。私は、それが子どもたちの本音なのだと思うし、それでよいのだとも思った。

子どもにとって書くことは教師である私に対するメッセージだったのだ。子どもの「相手意識」の先にあったのは私だったのだ。そして、「書いてよかった」というのは、そこに、書くことの意味や良さが存在していたということである。

「書くこと」は、単なるスキル学習であってはならないのである。教科書のパターンにあてはめるだけの作文、相手意識もなく行事のたびに書かされる作文、夏休みの宿題として書かされる読書感想文などは、子どもの「書く」ことを決して深めはしない。

文章を綴ることは人間として生きる上で大切なことである。書く機会が極端に少なくなっている今、学校で行う作文指導がますます大切なものとなっている。もっともっと子どもの書く機会を設けたい。書いてよかったという思いを抱かせたい。書くことは生きることだと考えて……。